

平成28年ジャッジズトレーニング報告

横浜市 松下 卓生

近年の気候変動は人間の生活に大きな影響を与えている。花菖蒲も例外ではなく、通常考えられているより開花時期が早まり、病虫害の被害も多くなっているような気がする。今後将来を見据えて、耐高温・耐病害性の高い品種の作出が急務になっていると感じざるを得ない。そんなことを考えながら、今年も恒例になったジャッジズトレーニングに参加するため会長宅に足を運んだ。



本日は天気も良く多少暑かったが何とか凌げる程度であった。参加人数は8名で香取顧問も参加して下さり、充実した内容となった。今回の一つ目の目的は各自が優れていると思う品種を選んで、それを発表することとであった。下の写真の花は今回私が選んだ「夕支度」である。この花を選んだ理由は、花弁の「くすんだ」色に注目し、日本の伝統色を花菖蒲で表現するうえで今後重要な貢献をするのではないかと考えたからである。



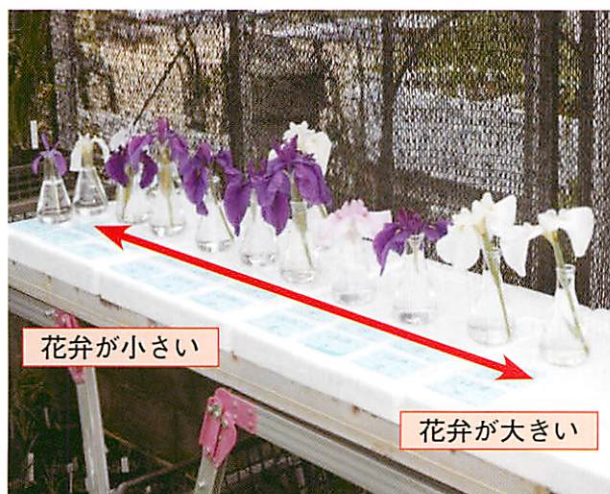
二つ目の目的はノハナショウブと栽培品種とを交配した後代実生群の中から、野生種であるノハナショウブから栽培品種に至るまでの進化が推定できるように、移行的な各段階の花型を持つ個体を選び出して、各段階での分類を協議することであった。手順としては、交配実生後代から代表的な花を採取して花弁の小さい方から大きい方へと順に並べた。次に、純粋なノハナショウブ「野生タイプ」をコントロールとして、それに対して「長井タイプ」か「江戸タイプ」かの何れに分類するかを参加者それぞれに判断してもらい、その境界線を明らかにしようという試みである。具体的には三角フラスコに入れた花の前に「長井」、「江戸」と書いた2枚の紙を置き、参加者が一人ずつ順番に自分が考えるタイプの表示紙に自分の名前を記入し、一番多く記載されたタイプをその花の一般的な認識とすることとした。

(注：長井古種は長井産ノハナショウブと江戸古花との園内交雑種であるとする仮説に立って、今回のこの報告書の中では、他所産ノハナショウブと栽培品種との人為交配種を長井タイプと呼称することとした。)

結果は写真の通りである。花弁の小さい方から順に①～⑨の番号を付けたが、①から④までが「長井タイプ」⑤から⑨までが「江戸タイプ」という様に、かなり明確に判断が付いた。特に注目すべきところは、④と⑤の違いであり、両者を比較したときに花弁の大きさ以外に形状の違い（例えば波状の有無）からも明確な差があるということではないかと考える。これについては一般的な「長井系」と「江戸系」のイメージがあり、それは各部分の大きさや配列もあるけれども、それ以外の部分、つまり「長井らしさ」「江戸らしさ」というものが栽培者の中には深層部分で構築されているということが証明されたのではないかと考える。例えば、品種紹介する場合、花菖蒲では戦後まで江戸・伊勢・肥後という様な系統分類が重要視されてきた。しかし、最近では各系統を複雑に交配してきたことから段々この認識は薄れてきた。逆にこ

の様な状況下で江戸系・伊勢系・肥後系それぞれの定義、つまり「この部分はこうあるべき」という各部の詳細な基準設定や、「こうだからこの系統である」といった一般的な認識の基準設定を行わなければならなくなった。今回の試みは、その様な言葉にできていない基準を明確な言葉で説明出来る様にするための事前調査として非常に有効だったのではないかと考えている。今後、この様な詳細な調査を積み重ねていくことで、花菖蒲の一般的な認識の基準を確立することが出来れば、少しでも花菖蒲の発展

に寄与できることを願いながら、次年度の開催を今から心待ちにしている。



ノハナショウブ×栽培品種を大きさ別に並べた



左端の3花は野生種 ①長井タイプ ②長井タイプ



③長井タイプ ④長井タイプ ⑤江戸タイプ



⑥江戸タイプ ⑦江戸タイプ ⑧江戸タイプ ⑨江戸タイプ

〈ノハナショウブと栽培品種との交配後代におけるタイプ分けの試み〉